

比 恵 53

—比恵遺跡群第110次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1003集

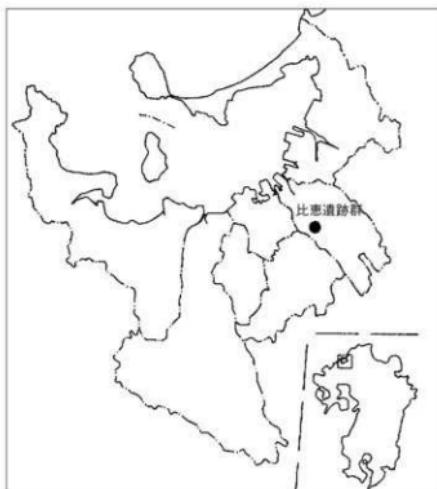
2 0 0 8

福岡市教育委員会

HI E
比 恵 53

—比恵遺跡群第110次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1003集



遺跡略号 HIE-110
調査番号 0645

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であり、本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は、葬祭場建設に伴い調査を実施した比恵遺跡群第110次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に弥生時代の集落跡を確認するとともに、多数の土器や石器等の生活用具が出土しました。これらは、当時の比恵地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、森林都市株式会社をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成20年 3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例　言

- 本書は、福岡市教育委員会が葬祭場建設に伴い、福岡市博多区博多駅南4丁目223番外において発掘調査を実施した比恵遺跡群第110次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、受託事業として実施した。
- 報告する調査の細目は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・名取さつきが行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・名取が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・名取が行った。
- 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
- 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系(第II座標系)によるものである。
- 遺構の呼称は、堅穴住居をSC、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、その他の遺構をSXと略号化した。
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	110次	遺跡略号	HIE-110
調査番号	0645	分布地図図幅名	東光寺37	遺跡登録番号	020127
申請面積	1,018.0m ²	調査対象面積	665.0m ²	調査面積	571.7m ²
調査地	福岡市博多区博多駅南4丁目223,237-1番				
調査期間	平成18(2006)年9月14日～11月15日				

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 比恵遺跡群の立地	2
2. 調査区周辺のこれまでの調査	2
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
1) 竪穴住居(SC)	5
2) 土坑(SK)	18
3) 溝(SD)	23
4) ピット(SP)	25
5) その他の遺構(SX)と遺物	26
3. 結語	26

挿図目次

第1図 比恵遺跡群位置図(1/25,000)	3
第2図 調査区位置図(1)(1/2,500)	4
第3図 調査区位置図(2)(1/1,000)	4
第4図 調査区全体図(1/150)	6
第5図 調査区南東壁面土層実測図(1/50)	7
第6図 SC005実測図(1/60)	8
第7図 SC009実測図(1/60)	9
第8図 SC009出土遺物実測図(1/2、1/3)	10
第9図 SC010・015・021実測図(1/60)	11
第10図 SC010出土遺物実測図(1)(1/3)	12
第11図 SC010出土遺物実測図(2)(1/2、1/3、1/4)	13
第12図 SC018実測図(1/30、1/60)	14
第13図 SC018・021出土遺物実測図(1/3、1/4、1/6)	15
第14図 SK001・002・003・016・019・020実測図(1/40)	16
第15図 SK001・002・003・019出土遺物実測図(1/3、1/4、1/6)	17
第16図 SK016出土遺物実測図(1)(1/3)	19
第17図 SK016出土遺物実測図(2)(1/2、1/3)	20
第18図 SD006・007・008実測図(1/40)およびSD007出土遺物実測図(1/2、1/3)	21

第19図 SD008出土遺物実測図(1/2、1/3)	22
第20図 SP033・034・043実測図(1/30)	23
第21図 ピット出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)	24
第22図 SX011および遺構検出時出土遺物実測図(1/3、1/4)	25

図版目次

- | | | |
|-------|---------------------------|----------------------------|
| 図 版 1 | (1) 調査区南東側全景(北から) | (2) 調査区北西側全景(北から) |
| 図 版 2 | (1) SC005(南西から) | (2) SC005(P11)(西から) |
| | (3) SC009(南東から) | (4) SC009土層(東から) |
| | (5) SC009(P 7)土層(西から) | (6) SC010(北東から) |
| 図 版 3 | (1) SC015(北西から) | (2) SC018(南東から) |
| | (3) SC018(P 1)(東から) | (4) SC018(P 2)(北東から) |
| | (5) SC018(P 3)(北から) | (6) SC021(南西から) |
| 図 版 4 | (1) SK001(東から) | (2) SK002(西から) |
| | (3) SK003(西から) | (4) SK016(北西から) |
| | (5) SK019(北から) | (6) SK020(南東から) |
| 図 版 5 | (1) SD006南東側(北西から) | (2) SD007(左)・SD008北側(南東から) |
| | (3) SD008南側(北西から) | (4) SD007(F - F')土層(北西から) |
| | (5) SD008(G - G')土層(北西から) | (6) SP043(北西から) |
| 図 版 6 | 出土遺物 | |

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成18(2006)年5月18日付けで、福岡市博多区博多駅南4丁目223、237-1番(敷地面積:1,018.0m²)における葬祭場建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、森林都市株式会社より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号:18-2-183)。

これを受けた教育委員会埋蔵文化財第1課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれていることから同年6月29日に確認調査を実施し、現況の耕作土直下において弥生時代と考えられる柱穴等を確認した。また、東側では台地が傾斜し、東端部には遺構が分布しないことも判明した。この確認調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、申請地の大半は、地下約7mまでの深さを対象に地盤改良を行う必要性があるため、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建築面積800.0m²のうち、遺構の分布する665.0m²を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、9月6日に森林都市株式会社代表取締役社長を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同月14日より発掘調査を、翌平成19年度に整理・報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託: 森林都市株式会社

調査主体: 福岡市教育委員会 文化財部 埋蔵文化財第1課

調査総括: 埋蔵文化財第1課長 山口讓治

同課調査係長 山崎龍雄(調査) 同課調査係長 米倉秀紀(整理)

調査庶務: 文化財管理課管理係 鈴木由喜

事前審査: 埋蔵文化財第1課事前審査係長 濱石哲也

同課主任文化財主事 吉留秀敏

同課事前審査係 本田浩二郎(確認調査)

調査担当: 同課調査係 榎本義嗣

調査作業: 阿部純子 上野照明 竹原吉秋 田端名穂子 中村幸子 永田とみ子

永松弘恵 花田則子 花田昌代 福田 操 藤澤義一 松下さゆり

光安昌子

整理作業: 木本恵利子 樋口三恵子 松尾真澄

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで森林都市株式会社、九州電力株式会社福岡電力所をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

1. 比恵遺跡群の立地

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から柏屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する比恵遺跡群は、このうち福岡平野に位置する。同平野の西側には背振山系に属する油山（標高：597m）から北側に発達する丘陵が派生し、早良平野と画される。また、東側には三郡山地より派生した大城山（標高：410m）の山麓から北西方向に月隈丘陵が延びて、柏屋平野との境界をなしている。また、平野内には御笠川、那珂川が博多湾へと北流し、沖積平野が形成されるが、河川の開析によって段丘が南北に連なる。

比恵遺跡群は、両河川に挟まれた中位段丘上に立地する遺跡で、この段丘は、花崗岩風化礫層を基盤とし、Aso-4 火碎流堆積による八女粘土および鳥栖ローム層を主な堆積物とする洪積丘陵である。南側は浅い谷部を介しながらも連続して同一丘陵上に占地する那珂遺跡群と一連の遺跡群を構成する。また、北側は、博多遺跡群が立地する古砂丘背面にあたる後背湿地となっている。遺跡の範囲は、那珂遺跡群と併せて南北約2.4km、東西約0.8kmに及び、現地表の標高は約4.5~9 mを測る。なお、現在は、戦前の区画整理事業や市街地化による大規模な地形改変により、平坦な地形をなしているが、これまでの調査成果からは、狭い谷や河道が複数開析し、起伏のある樹状を呈する丘陵であったことが判明している。

2. 調査区周辺のこれまでの調査

本遺跡群は、これまでの調査成果から河道や谷部により大きく3地点の台地に分かれる。遺跡群の大半を占める中央台地の北側には東西方向の河道を挟み、北台地が、また、西側には幅100m以上の南北方向の谷部（河道）を介し、西台地が島状に存在する。

今回報告する第110次調査区は、このうち、北台地に位置している。本台地上ではこれまで比較的多数の調査が行われ、微地形の復元や遺構の時期、分布の把握がなされつつある。主な遺構の時期は、弥生時代前期から中期後半で、該期の竪穴住居や貯蔵穴、貯木土坑、井戸、溝等の遺構が確認されている。台地の南限は、中央台地から分離する上述した河道で、第31次調査区でその北岸が確認され、壁面の傾斜から人為的な掘削も指摘されている。また、北側は北西方向からの狭い谷の開析により東西二つの支尾根が形成される。この両尾根に挟まれた谷部の調査は第24・25・32・80次の各調査区で実施され、貯木土坑や台地からの廃棄によって形成された包含層が確認されており、当時の谷地形の利用のあり方を窺うことができる。また、西側尾根の先端部では第98次調査が行われているが、僅かに北側に台地が延びる可能性がある。また、東側の先端部の第29次調査区では、台地の落ち際が検出され、その端部が把握されている。

本調査区は、このような地形を呈する北台地の東側支尾根の尾根線からやや下った北東側緩斜面上に位置する。周辺隣接地では、台地上の調査が行われており、南東側の第90次調査区では松菊里タイプを含む竪穴住居や貯蔵穴、溝が検出されており、本調査によてもこれらが、北西側に広がることが確認できた。また、南側の第30・31・37次調査では、併せて計41基の貯蔵穴が集中して分布し、周辺の竪穴住居を含め、弥生時代前期集落の様相が判明しつつある。また、中期後半代の井戸や土坑、溝も少數ながら各調査区で認められる。

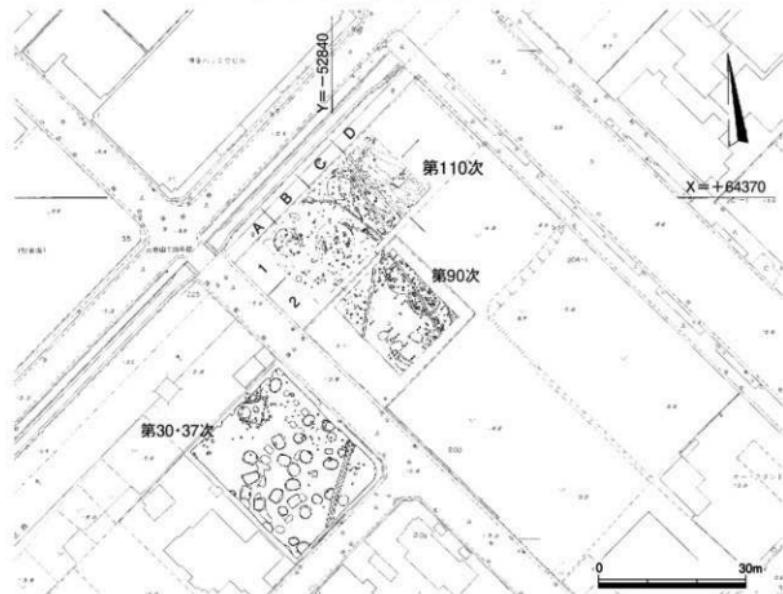


- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|------------|
| 1 比恵遺跡群 | 2 山王遺跡群 | 3 那珂遺跡群 | 4 雀居遺跡 | 5 那珂君体遺跡群 |
| 6 板付遺跡 | 7 高畠遺跡 | 8 五十川遺跡群 | 9 諸岡A遺跡群 | 10 諸岡B遺跡群 |
| 11 下月隈C遺跡群 | 12 立花寺B遺跡群 | 13 井相田D遺跡群 | 14 仲島遺跡群 | 15 井相田C遺跡群 |
| 16 井尻B遺跡群 | 17 三筑遺跡 | 18 麦野A遺跡群 | 19 麦野B遺跡群 | 20 麦野C遺跡群 |
| 21 南八幡遺跡群 | 22 須玖遺跡群 | | | |

第1図 比恵遺跡群位置図(1/25,000)



第2図 調査区位置図(1) (1/2,500)



第3図 調査区位置図(2) (1/1,000)

III. 調査の記録

1. 概要

今回報告する第110次調査区は、博多区博多駅南4丁目223、237-1番に所在する。調査前の状況は、標高約5mを測る畠地であった。

まず調査区の土層(第5図参照)は、基盤が暗黄橙色を呈する鳥栖ローム層で、丘陵尾根側となる南西から谷側の北東方向に傾斜している。今回の発掘調査は同層の上面を遺構面とし、その上層に堆積する1~4層の大半を重機で剥ぎ取って実施した。調査区の南西部では畠地耕作土(1層)直下が鳥栖ローム層となり、その標高は約4.8mを測る。また、調査区の北東端部から約12m付近より緩い傾斜が始まり、北端部では標高約3.8mとなる。1層下には淡黄褐色土(2層)が薄く認められるが、畠地造成時の客土層と考えられる。更に下層には、弥生土器を含む褐色系の粘性土(3・4層)が鳥栖ローム層上に自然堆積している。この両層については、一部をSX011包含層とし、調査区内にベルトを残し、人力にて掘り下げた(「III.-2.-5」その他の遺構と遺物」参照)。なお、この上面でも中世のSP034を検出している。また、土層観察によっても、弥生時代中期末頃に位置付けられるSD008は4層から掘り込まれることや、他にも同層から切り込み溝状の遺構を確認できた。

今回の調査では、尾根側の南西側は削平により遺構の遺存状況はやや不良であるものの、弥生時代前期から後期初頭の竪穴住居や土坑、溝および古墳時代前期の土坑、中世のピットを検出できた。

発掘調査は平成18(2006)年9月14日から開始した。なお、調査時の排土については、場内で処理を行わざるを得なかったため、南側約2/3の調査を先行し、排土反転後、残る北側1/3の調査を行うこととした。まず、重機による南側の表土剥ぎ取りから着手し、翌日から重機による作業と並行しながら、発掘器材の搬入や調査区の壁面養生等を行なった。20日より遺構検出等の人力作業を開始し、その後、検出遺構の掘り下げや、遺物の取り上げ、写真撮影、図化等の作業を進め、10月20日に高所作業車による南側の全体写真を撮影した。23日より重機によって排土を反転し、北側の表土剥ぎ取りを開始した。26日から同様の作業を進め、11月10日に北側部分の全体写真を撮影した。その後、13日に調査区を重機によって埋め戻し、15日に発掘器材等を撤収し、第110次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「I.-1.調査に至る経緯」とおり、申請面積1,018.0m²のうち665.0m²であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は571.7m²であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、竪穴住居(SC)を構成する柱穴や土坑については、報告時点でP1から順に番号を付し、整理を行っている。

2. 遺構と遺物

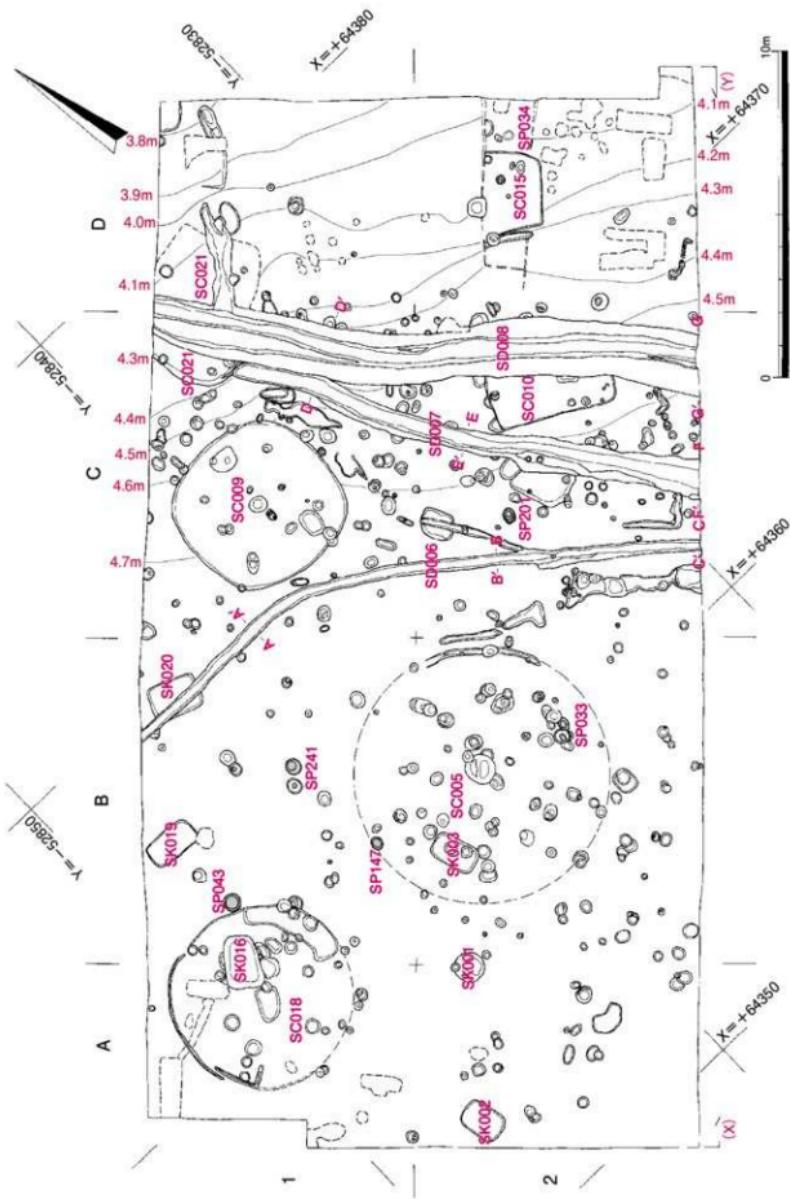
以下、遺構種別順に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(西から東方向にA、B、….)と数字(北側を1、南側を2)を組み合わせたグリッド表記を用いる(第4図参照)。

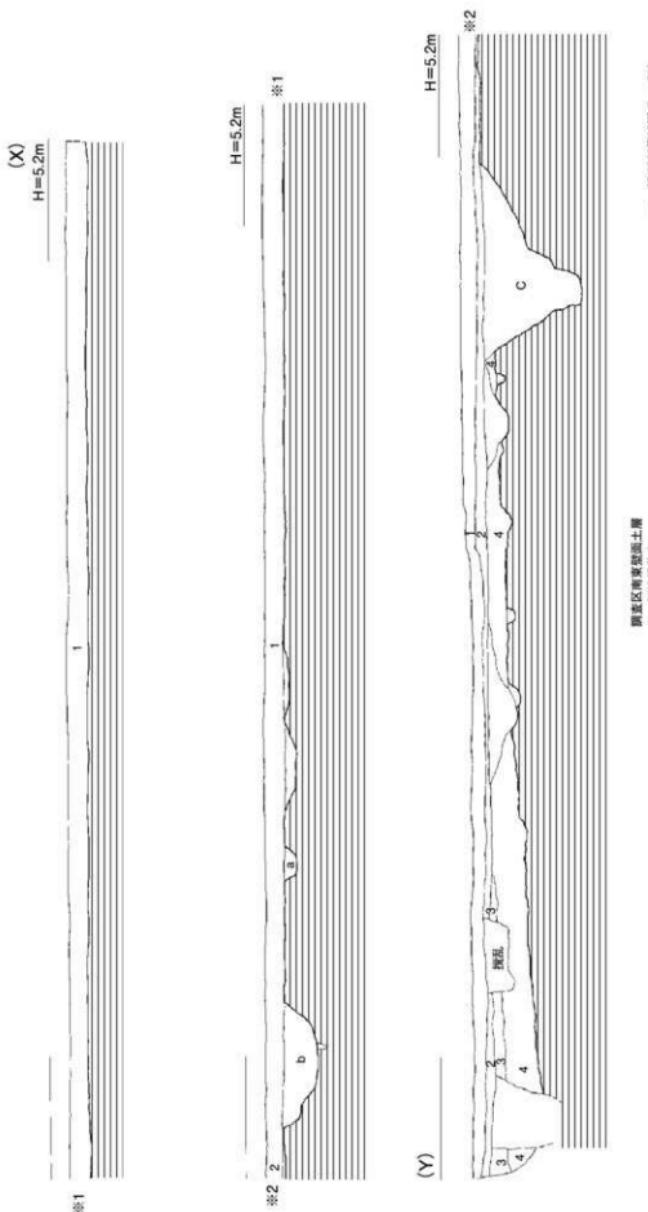
1) 竪穴住居(SC)

出土遺物が少ない遺構もあるが、全て弥生時代の住居と考えられ、総数6軒を検出した。

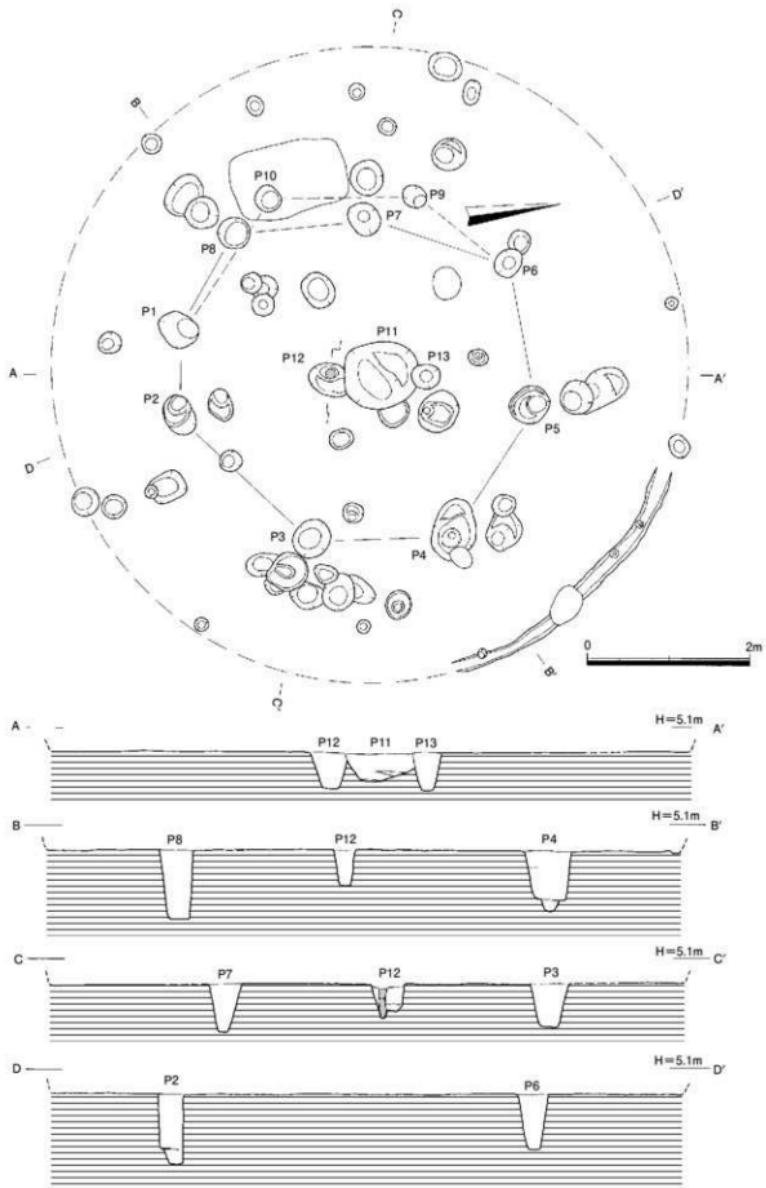
SC005(第6図) B-1・2区で検出した円形竪穴住居である。北東側の一部に幅0.2mの深い壁溝を残すが、壁面の大半が削平されている。この壁溝および内部の土坑や柱穴の配置から径約7.8m

第4図 調査区全体図(1/150)

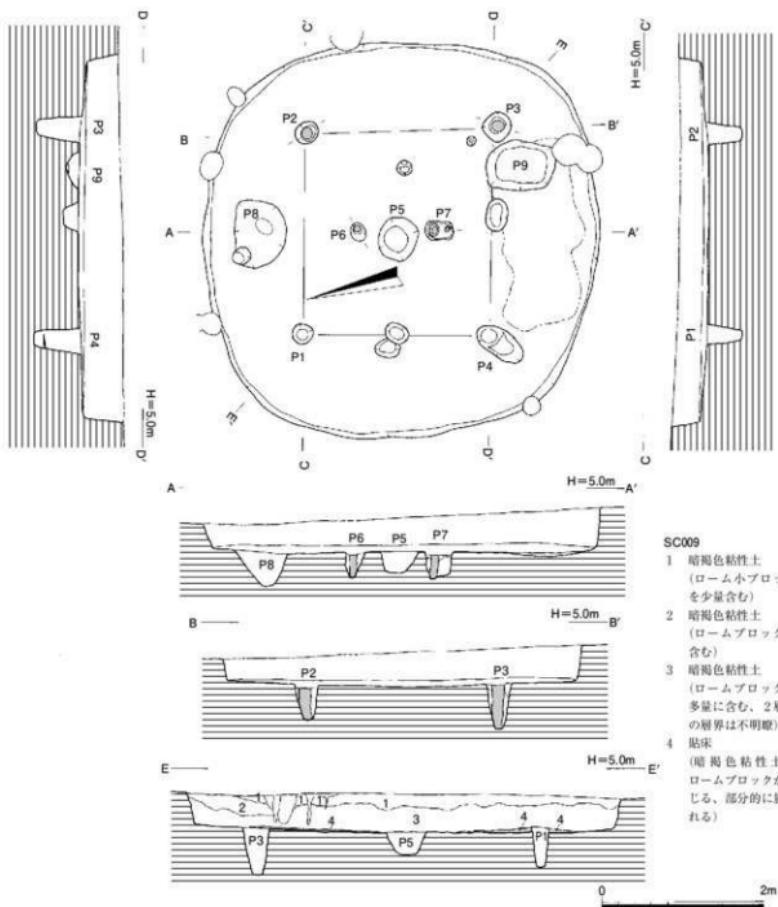




第5図 調査区南東壁面上層実測図(1/50)

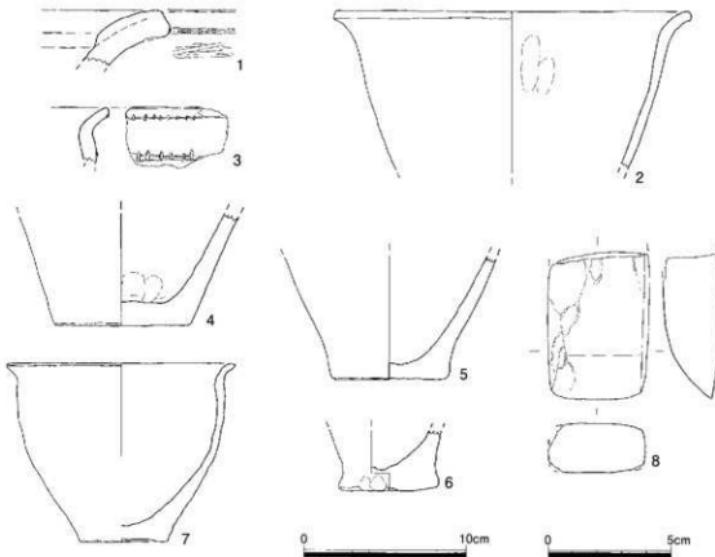


第6図 SC005実測図(1/60)



第7図 SC009実測図(1/60)

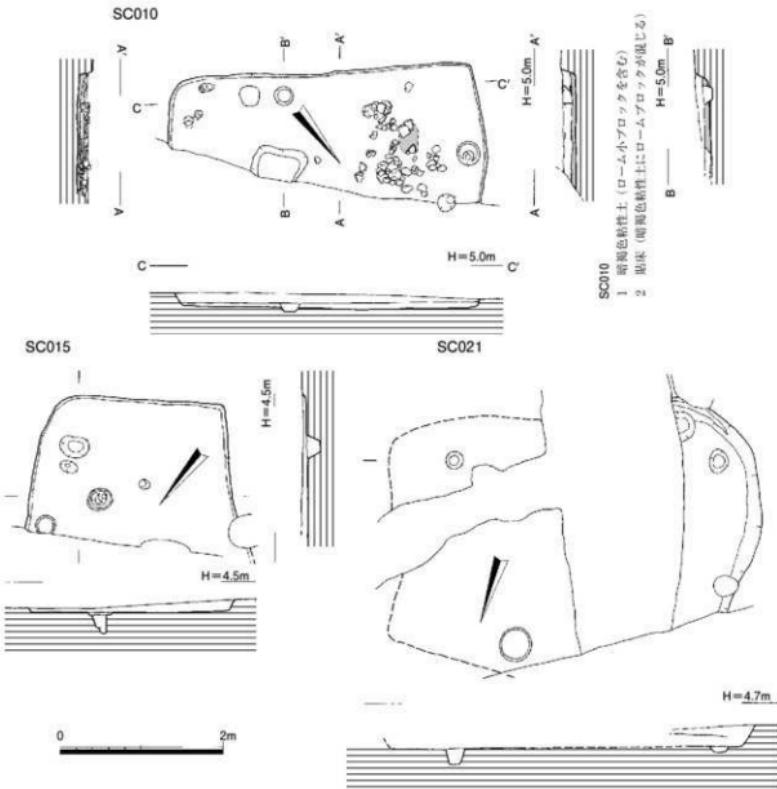
を測る円形プランを復元したもので、両脇にピットを配する中央土坑(P11～P13)を有するいわゆる松菊里タイプの住居である。主柱穴は壁面の内側約1.5～2.0mを巡るP1～P8もしくはP1～P6・9・10の8本柱であると考えられ、各柱間は1～2.4mと不規則な配置であるが、P11・12を主軸とすれば、両側に4本ずつが非対称ながら配される。また、重複関係がないため、前後関係不明であるが、P7・8およびP9・10はそれぞれ建替え時の主柱穴であろう。なお、P10は後述するSK003を掘り下げる底面で確認したものの、本遺構はSK003に先行する。主柱穴は円形を呈するもの



第8図 SC009出土遺物実測図(8は1/2、他は1/3)

が大半で、径0.4~0.5m、深さは現況の床面から0.5~0.9mを測る。不整な梢円形を呈する中央土坑P11は北側にテラスを有し、深さ約0.3mである。覆土中層に炭化物片が少量認められた。また、両脇の小ピット(P12・13)はP11と重複関係にあり、主柱穴に比してやや小振りである。深さは約0.5mで、P12には径約9cmの柱痕跡が認められた。遺物はP11や主柱穴から出土しているが、いずれも弥生土器と考えられる細片および黒曜石剥片が少量で、図化し得ない。遺構の時期は、SK003との前後関係および主柱穴等の配置から弥生時代前期後半から中期初頭と推定される。

SC009(第7図) C-1区に位置する。SC005同様の両脇に小ピットを配する中央土坑(P5~P7)を床面中央部に有する松葉里タイプの住居で、平面プランは四方が弧を描く方形気味の円形を呈する。径は約4.9mである。遺存状況は比較的良好で、壁面は尾根側で約0.5m、谷側で約0.3mの高さを測る。覆土は類似した暗褐色粘性土を主体とし(1~3層)、壁際を除く床面には薄く貼床(4層)が施されている。主柱穴はP1~P4の4本柱で、柱間は東西約2.5m、南北2.3mを測り、やや東西に長い方形の配置をなす。柱穴の平面プランはP4が梢円形であるが、他は円形で、径0.25~0.4m、床面からの深さ0.4~0.6mを測る。P2およびP3では径約15cmの柱痕跡を検出した。中央土坑P5は径約0.5mの円形プランで、深さ0.25mを測り、覆土はローム小ブロックを含む暗褐色粘性土である。炭化物や焼土は認められなかった。その両脇のピットは、P6が径0.2mの円形、P7は幅0.2m、長さ0.3mの隅丸長方形を呈し、深さ0.3m前後である。また共に径約9cmの柱痕跡が確認できた。また、これら以外にP8、P9の土坑状に掘り込みがあり、P8の中層から下層にかけては、ロームブロックを多量に含む人為的な埋土が認められた。P9は深さ0.15m程度である。P9の西側、P3

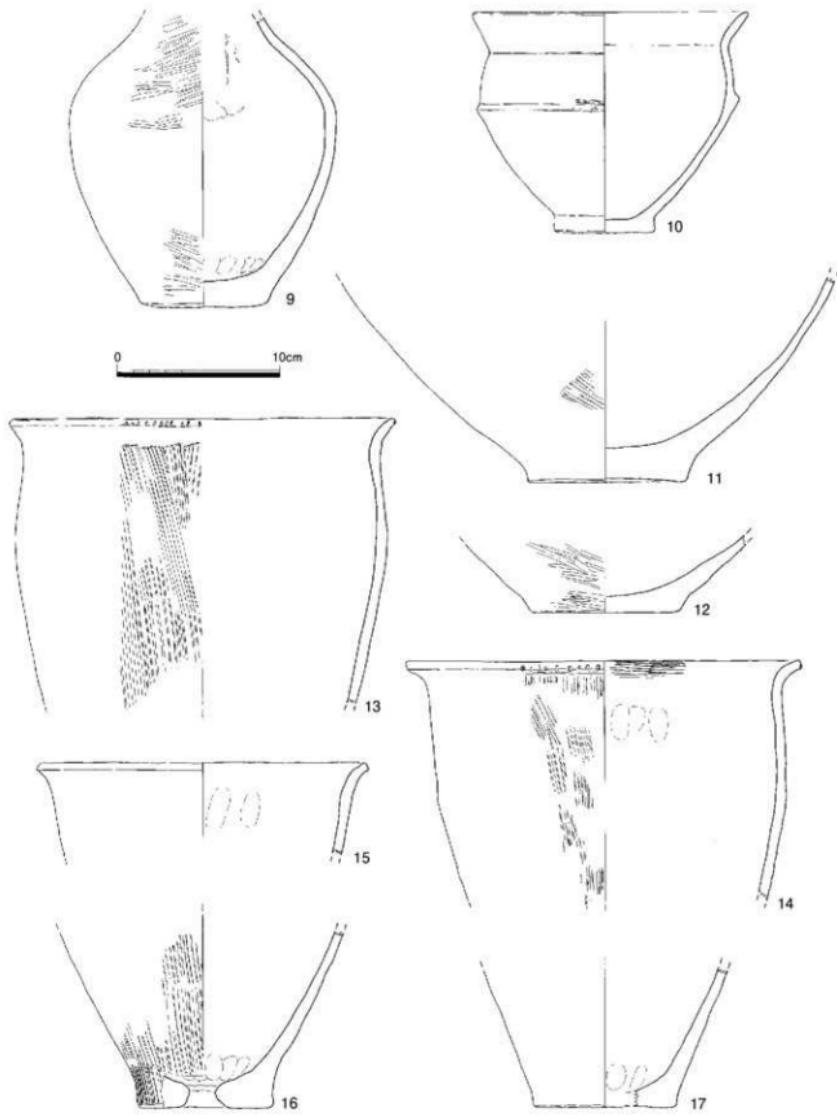


第9図 SC010・015・021実測図(1/60)

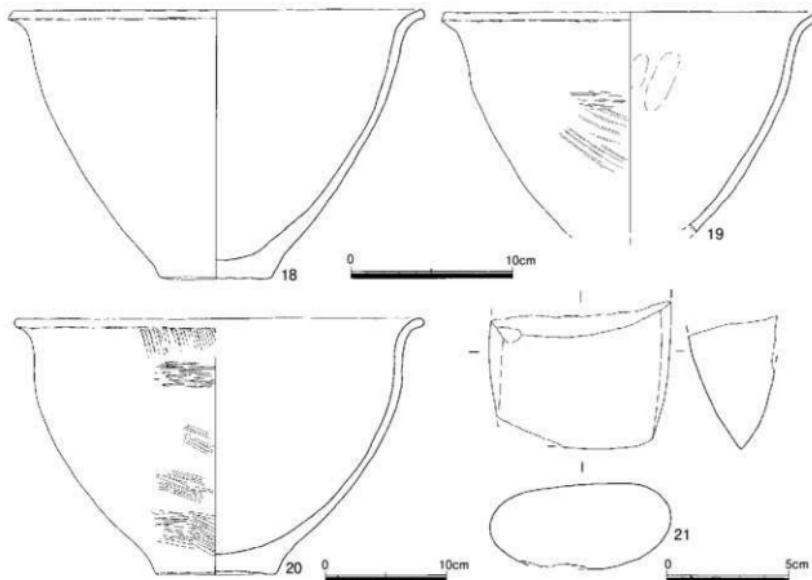
およびP 4の柱間から壁面際一帯は床面が汚れ、また、僅かに窪み状を呈しており、出入口の可能性がある。

出土遺物(第8図) 覆土中からの出土が大半で、床面上の遺物はない。1~7は弥生土器で、器面の風化がすすむ。1は壺の口縁部片で、外反する口縁部の内面に幅約4cmの粘土を貼付する。口縁部の下端にヘラ状工具による浅い刻目を有する。2~6は壺である。2・3は如意形の口縁部を呈し、3は口縁部下端と口縁下の鈍い段上にヘラによる刻目を施す。2には刻目がない。4~6は底部である。4・5は平底、6はやや厚手で端部がやや外に張り出し、外底部が僅かに窪む。7は如意形口縁の鉢で、器面の風化が著しい。8は長岩製の扁平片刃石斧で、基部を欠損する。幅4.1cm、厚さ2.0cmを測り、断面は長方形である。他に弥生土器の細片や黒曜石の剥片が出土している。以上の出土遺物から弥生時代前期後半の竪穴住居と考えられる。

SC010(第9図) C-2区の緩斜面上に位置し、SD008に切られる方形竪穴住居である。現存する



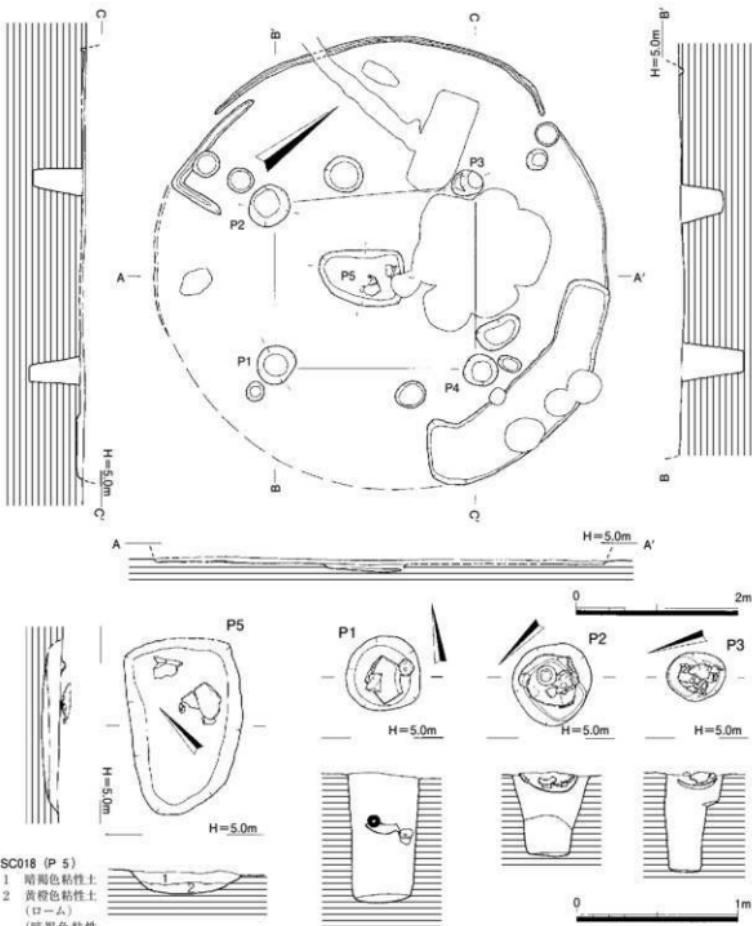
第10図 SC010出土遺物実測図(1)(1/3)



第11図 SC010出土遺物実測図(2)(21は1/2、20は1/4、他は1/3)

一辺は約3.7mを測る。壁面は高さ0.15mが遺存する。床面には厚さ約5cmの貼床(2層)が施され、その上面では東側を主体に弥生土器が出土した。また、ピットを数基確認したが、主柱穴は不明である。東側の土器集中箇所の網掛け部では貼床面上に約0.2×0.4mの範囲において焼土が認められ、床面が数cm被熱するが、掘り方はない。

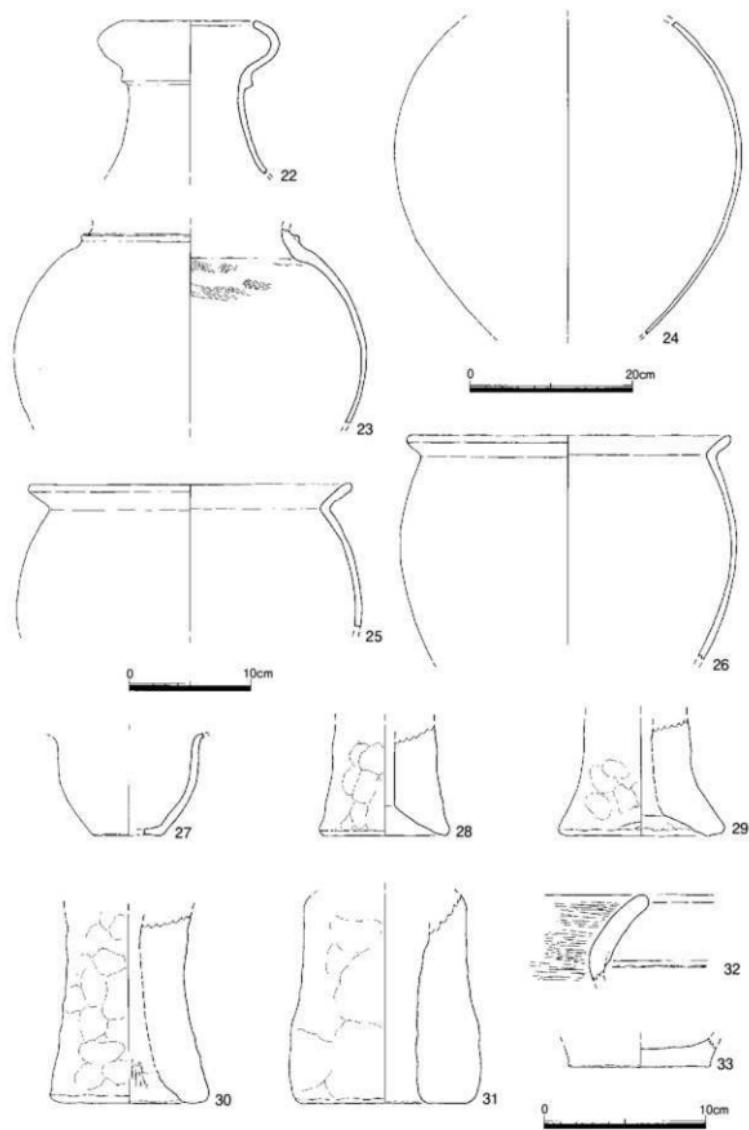
出土遺物(第10・11図) いずれも貼床面上の出土遺物で、9～20は弥生土器である。器面が風化するものが多い。9～12は壺で、9は長胴の胴部に強くすばむ頸部が付く。外面は横および斜方向のヘラ研磨、内面はナデ調整を加えるが、指オサエが残る。10は特異な器形の壺で、胴部最大径で屈曲し、鈍い突帶状をなす。頸部へは緩くすばみ、外反する口縁部を有する。屈曲部には僅かながら赤色顔料が認められるが、器面の剥落がすすむ。11・12は底部で、11の外面には刷毛目、12にはヘラ研磨調整を施す。11は大形品であろう。13～17は甕である。13～15は如意形の口縁部を呈するもので、13は狭い口唇部の全面、14は下端部にヘラ状工具による刻目を施す。共に体部にはやや張りがあり、外面に粗い刷毛目調整を行う。15の口唇部には刻目ではなく、ヨコナデにより僅かに凹面をなす。16・17は平底の底部で、16は焼成後に主に外面から穿孔し、瓶とする。18～20は刻目のない如意形口縁の鉢である。18・19は胴部に張りがなく、直線的に底部へと続く。口縁部は面取りを行い、ヨコナデを施す。外面は風化するが、19には刷毛目が僅かに残る。20の口縁部は丸く收め、丸味のある体部に大きめの底部を有する。外面の調整は、口縁下に刷毛目、体部にはヘラ研磨を施す。21は玄武岩製の大型船刃石斧で、刃部のみが遺存する。断面は扁平な長方形を呈し、現存での最大幅は7.4cmを測る。他に



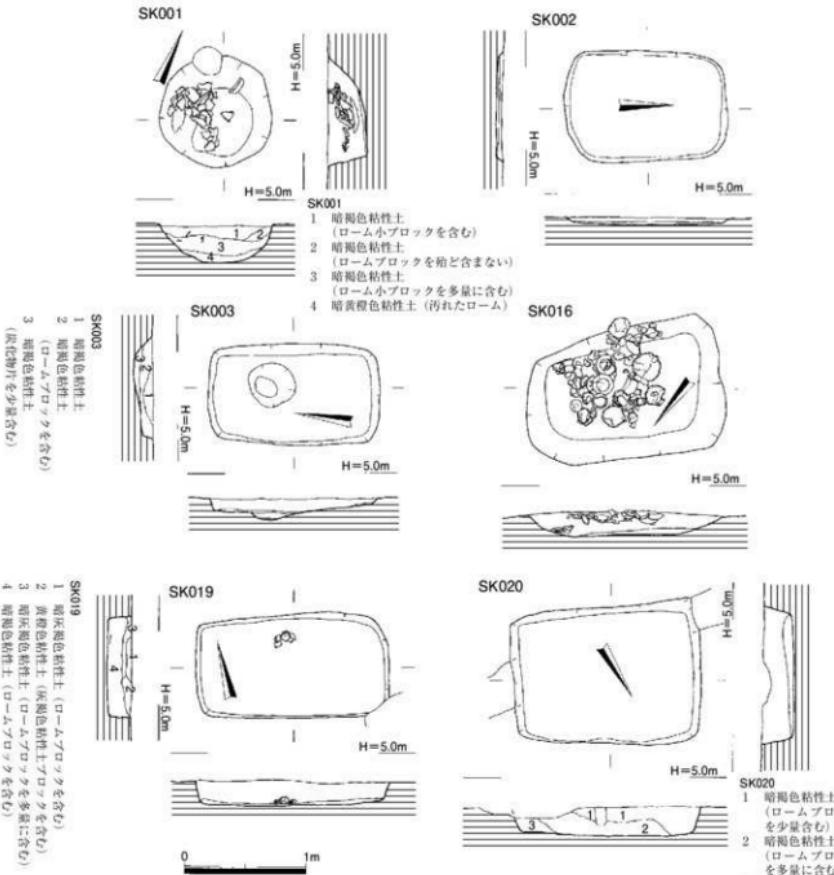
第12図 SC018実測図(P 1～3・5は1/30、遺構全体図は1/60)

黒曜石剥片等が少量出土した。これらの遺物から弥生時代前期後半の遺構に位置付けられる。

SX015(第9図) D-2区の斜面上で確認した小形の方形堅穴住居である。SX011包含層調査のため、任意の設置したベルト下で検出した遺構で、包含層(第5図の3・4層)ではなく、鳥栖ローム層から掘り込まれている。なお、北側は重機による剥ぎ取り時にややローム層を下げすぎてしまつたため、プランが不明確となっている。一辺2.5mを測り、壁面は高さ0.1m前後しか遺存していない。覆土は4層と類似する暗褐色粘質土を主体とし、ロームの小ブロックを含む。床面ではピット状の掘り



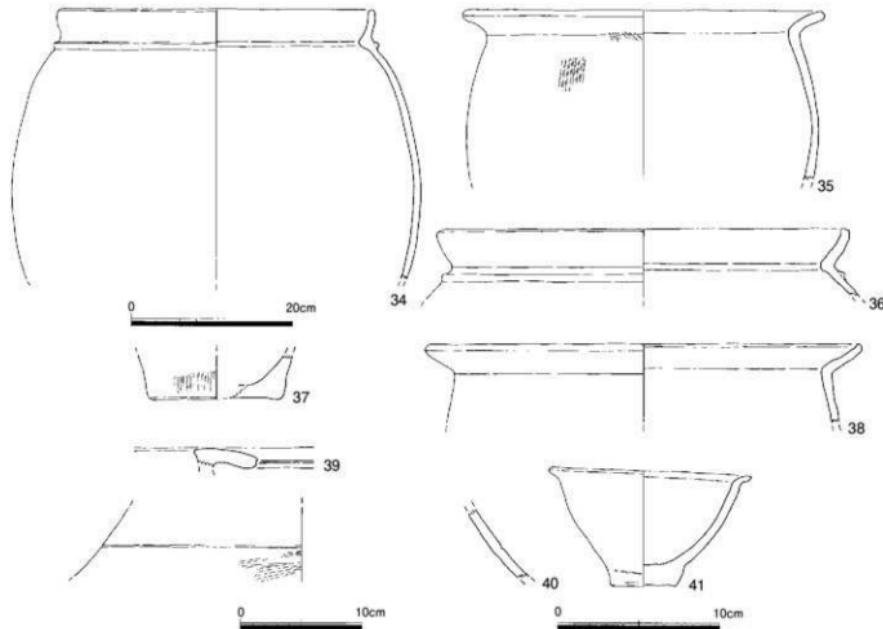
第13図 SC018・021出土遺物実測図(25・26は1/4、23・24は1/6、他は1/3)



第14図 SK001・002・003・016・019・020実測図(1/40)

込みを数基検出したが、主柱穴としてとりまとめるには至っていない。出土遺物は弥生土器の細片が10点未満出土したにとどまり、いずれも固化し得ない。ただし、包含層との前後関係からこの遺構は、弥生時代前期から中期の所産と推定される。

SC018(第12図) 調査区北西端のA・B-1区に位置する円形プランの堅穴住居であるが、壁面の大半は削平される。北西側に僅かに残る壁溝および貼床もしくは覆土の最下層と考えられる全体的な遺構面上に広がる汚れた層からプランを推定したもので、径は5.5~5.7mを測る。東側には住居のプランに沿って、幅0.5~0.7mの溝が巡るが、極浅い。主柱穴はP1~P4の4本柱で、柱間は南北約2.5m、東西ではP1-P2間が約2.0m、P3-P4間が約2.3mを測る。柱穴の平面プランは、ほぼ



第15図 SK001・002・003・019出土遺物実測図(36・40は1/4、34は1/6、他は1/3)

円形で、径0.35~0.5m、現況の床面からの深さ約0.5~0.8mである。P 1~P 3では覆土の上層もしくは中層から比較的大きな土器片が出土した。中央には長さ1.1m、幅0.7m、深さ0.3mの不整な隅丸長方形状の土坑(P 5)が掘り込まれるが、炭化物や焼土は認められなかった。

出土遺物(第13図22~31) いずれも器面の風化が著しい弥生土器である。22~24は壺である。22は袋状口縁壺で、口縁下に断面三角形の突帯が1条巡る。23・24は広口壺の胴部片と考えられる。23は頸部下に突帯を貼付し、内面に刷毛目調整が残る。25・26は甕で、逆「L」字形の口縁部は強く立ち上がり、胴部に張りがみられる。27は小形の鉢で、底部が広い。28~31は支脚で、いずれも指オサエによる調整が顕著である。31を除き、据部が広がる。23・28~31はP 1、22・24はP 2、26はP 3、25・27はP 5からそれぞれ出土した。なお、壁溝は出土遺物がなく、床面上の汚れた層からは弥生土器の細片が少量出土している。これらの出土遺物から弥生時代中期末の堅穴住居と考えられる。

SC021(第9図) C・D-1区の緩斜面上に位置し、SD007およびSD008に切られる。また、北西側の一部は調査区外に延びる。西側では壁面が高さ0.2m程度遺存するが、谷側では大半が削平され、ロームブロック混じりの暗褐色粘性土が薄く広がるにとどまる。図中の破線はその範囲を示したもので、東西4.5m以上、南北3m以上の方形プランを呈するが、西側では壁面が曲線的で、円形もしくはSC009のような平面形態であった可能性もある。なお、床面ではピットを数基確認したが、主柱穴は不明である。

出土遺物(第13図32・33) 共に弥生土器の細片である。32は壺の口縁部で、外面に粘土を貼付し、段を形成する。内面にはヘラ研磨による調整が残る。33は壺底部で、薄い平底である。他にも弥生土器の細片が少量出土している。遺物は少量ながら、弥生時代前期に位置付けられる遺構であろう。

2) 土坑(SK)

SK016が古墳時代前期、他は弥生時代前期から中期の土坑である。

SK001(第14図) A・B-2区で検出した円形プランの土坑で、径約0.9mを測る。南西側に狭いテラスを有し、深さは約0.3mである。底面は南東側に傾斜し、覆土の中層から上層にかけて弥生土器の壺片が廃棄されていた。

出土遺物(第15図34~36) いずれも弥生土器の壺である。34は小片の大半が接合したもので、端部を丸く収める口縁部は強く立ち上がり、その内面は凹面をなす。口縁下には断面三角形の比較的シャープな突帯を貼付する。調整は器面の風化により不明である。復元口径は38.4cmを測る。35は逆「L」字状の口縁部をなすもので、やや立ち上がる。器面の風化がすすむが、外面の一部に刷毛目が残る。36は34と類似した形態をなすが、口縁端部は平坦で、ヨコナデにより中央部が僅かに窪む。内面屈曲部の稜は鈍い。他に黒曜石の細片等が出土した。弥生時代中期末の土坑と考えられる。

SK002(第14図) A-2区に位置する。平面プランは隅丸長方形で、長さ1.3m、幅0.9mを測る。尾根側に位置するため、削平が著しく、現況の深さは0.05mである。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色粘性土である。底面はほぼ平坦である。

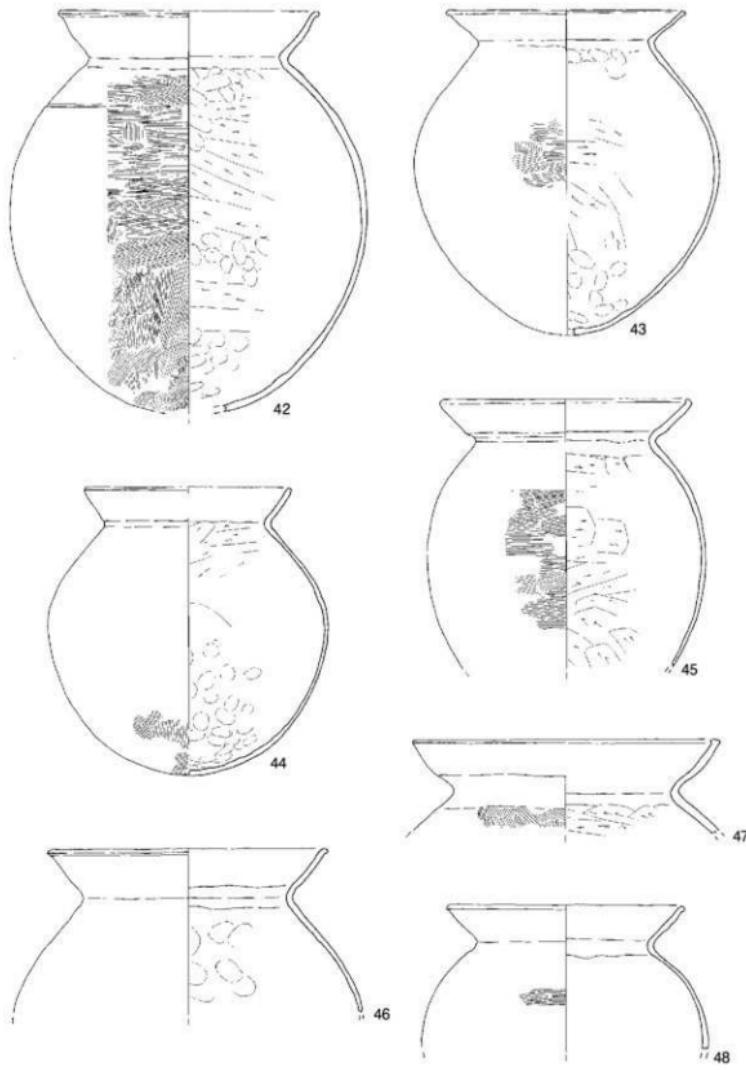
出土遺物(第15図37) 37は弥生土器壺の底部片である。外面は刷毛目、内面にはナデを施す。他に弥生土器が少量出土しているがいずれも細片である。弥生時代前期の遺構と推定される。

SK003(第14図) A-2区で確認した隅丸長方形プランの土坑で、SC005を切る。長さ1.4m、幅0.8mを測り、深さは0.15mである。SC005同様に大きく削平を受けているものと考えられる。底面の北側には浅い窪み状のピットが認められた。

出土遺物(第15図38・39) 共に弥生土器の壺である。38は立ち上がる逆「L」字状の口縁部を呈し、端部はヨコナデにより僅かに摘み出す。39は鶴形の口縁部をなすもので、口唇部には赤色顔料が残る。他に弥生土器の細片や黒曜石剥片が少量出土している。弥生時代中期末の遺構に位置付けられる。

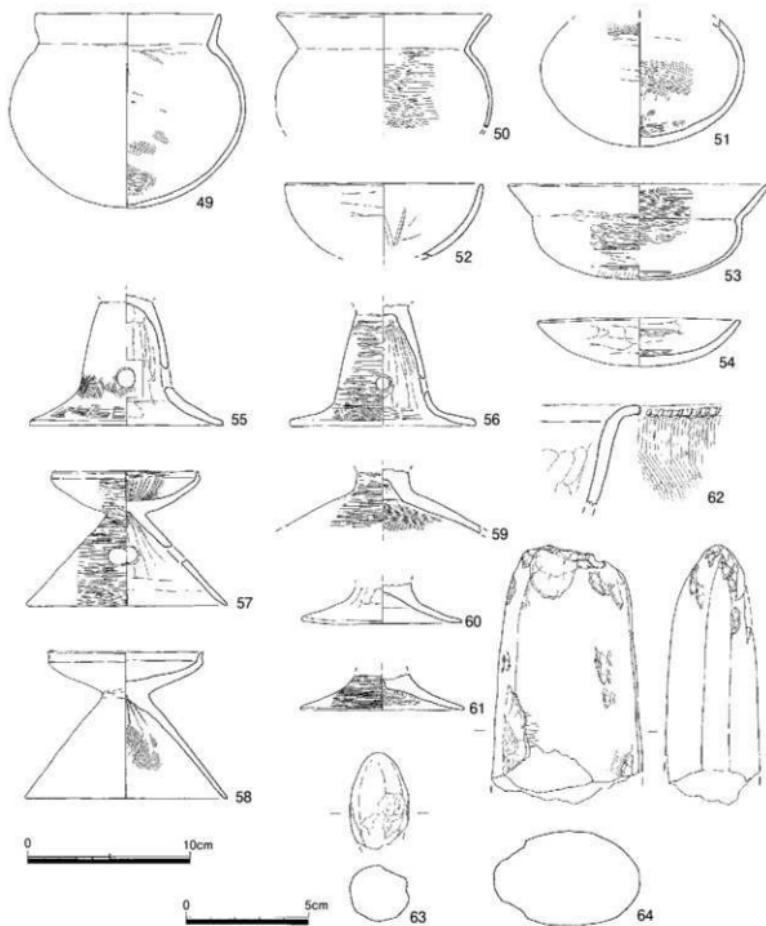
SK016(第14図) A・B-1区で検出した土坑で、SC018の僅かに残る床面の覆土を切る。平面プランは不整な隅丸長方形で、長さ1.6m、幅1.1m、深さ0.2mが遺存する。壁面の傾斜は緩く、断面は逆台形を呈する。覆土はロームブロックを僅かに含む暗褐色粘性土を主体とし、底面からやや浮いた状態で、多量の土師器が廃棄されていた。

出土遺物(第16・17図) 42~61は畿内系土師器で、42~48は布留式系壺である。ナデ肩に球形の胴部を有する。胴部内面はヘラ削り、外面は細かい刷毛目調整を施す。42の胴部上半には浅い沈線が巡り、外面には煤が付着する。口縁部形態は、45・47は内湾気味に立ち上がり、端部を内面に摘み出す。他はやや内湾気味ながら直線的で、42・46は外側に突出がみられる。器面の色調は42のみが褐色で、他は淡黄白色を呈する。49~51は壺で、扁球状の胴部を呈する。49は短く立ち上がる口縁部が付くもので、器面が風化する。器面が薄く、内面はヘラ削りであろう。50・51は内面に刷毛目調整を施し、50は薄手のつくりである。52~54は鉢である。52の体部は開くが、口縁部は直立気味に収める。53は扁平な体部に直線的に開く口縁部を付すもので、口縁部内面は刷毛目、他はヘラ研磨による調整を行う。赤橙色を呈する。54は皿状をなすもので、器面の大半は剥落するが、内面にヘラ研磨調整が残る。55・56は高壺の脚部で、穿孔を有するエンタシス状の柱状部に開く裾部が付く。外面および裾部内面には刷毛目調整を行なうが、56の柱状部には横方向の丁寧なヘラ研磨を加える。57・58は器台で、類似



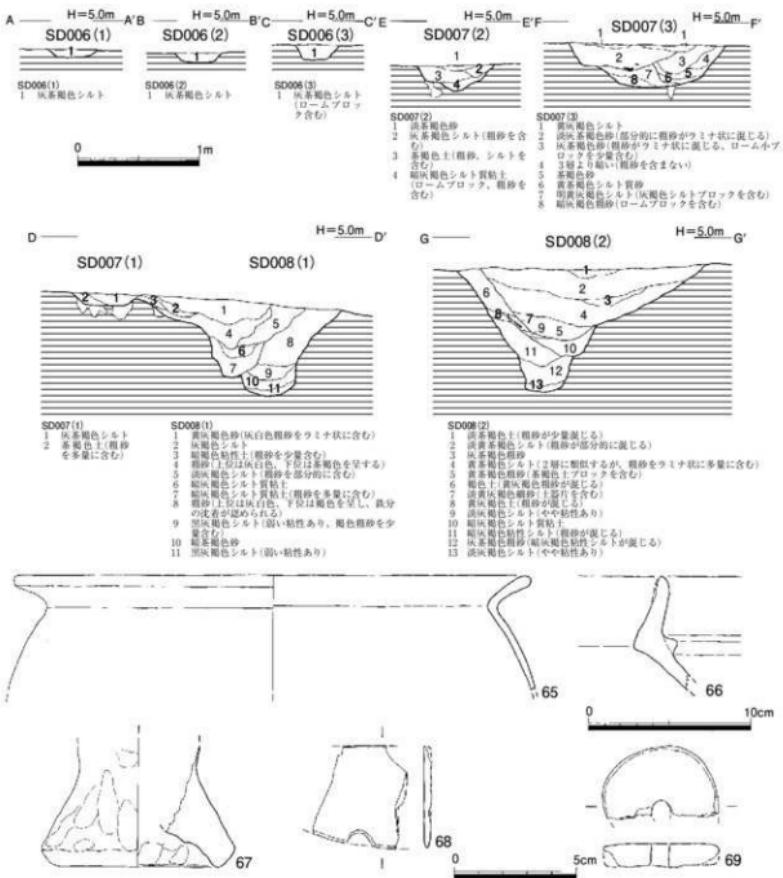
0 10cm

第16図 SK016出土遺物実測図(1)(1/3)



第17図 SK016出土遺物実測図(2)(63・64は1/2、他は1/3)

した形態を呈する。器受部の端部を外反気味に立ち上げ、やや丸味のある体部に「ハ」字状に聞く脚部を有する。57は赤褐色の色調で、外面は横方向のヘラ研磨、器受部の内面には暗文風のミガキを施す。脚部の一部は欠損するが、4箇所に穿孔が認められる。58は器面の風化が著しいが、脚部内面に刷毛目が残る。器面の色調は淡黄白色である。59~61は上部を欠損する台もしくは脚部である。59・61の外面は刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨を加える。62~64は弥生時代の混入遺物で、62は如意形

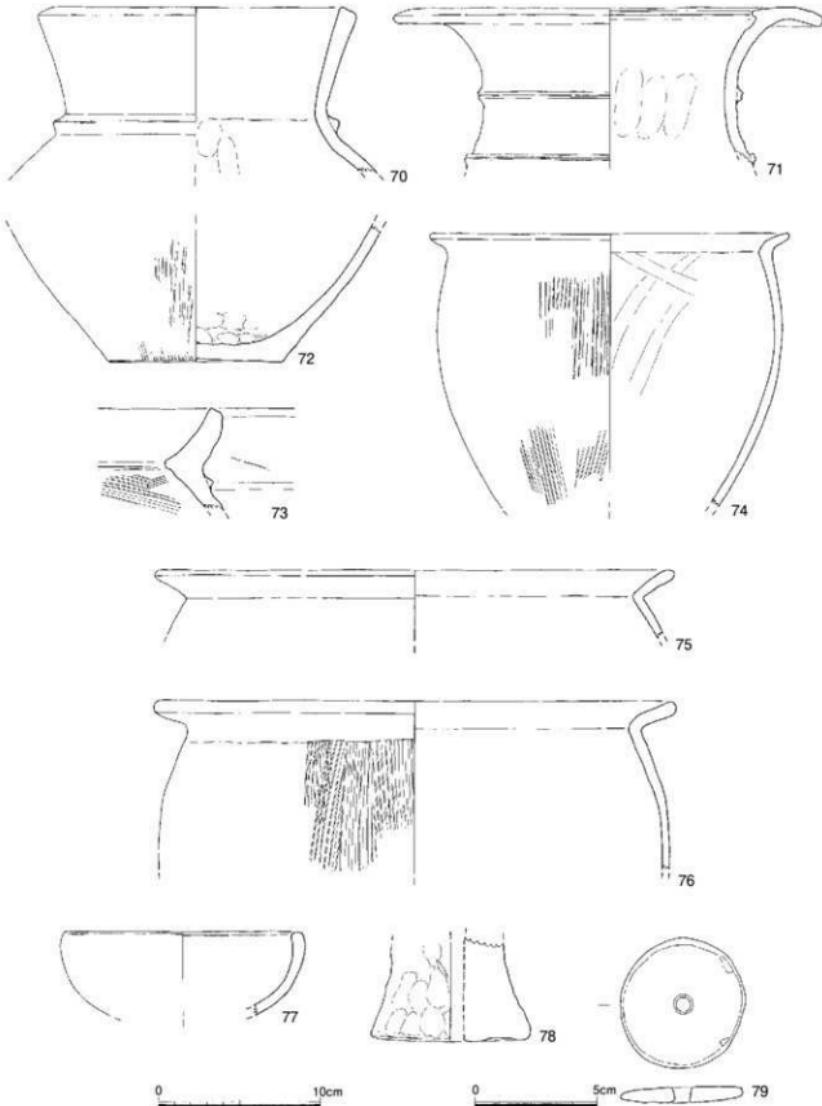


第18図 SD006-007-008実測図(1/40)およびSD007出土遺物実測図(68・69は1/2、他は1/3)

口縁の甕、63は土製投弾、64は玄武岩製の磨製石斧の基部である。以上の出土遺物からこの土坑は古墳時代前期の所産と考えられる。

SK019(第14図) B-1区に位置する長方形プランの土坑で、長さ1.6m、幅0.85mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、深さは0.2mを測る。覆土にはロームブロックが多く混じり、平坦な底面上では、弥生土器鉢(41)が出土した。小形の貯藏穴の可能性が高い。

出土遺物(第15図40・41) 共に弥生土器である。40は壺の頸部片で、細片からの復元である。頸部下に沈線を1条施し、ヘラ研磨調整が残る。41は如意形口縁の鉢で、口縁部を強く外反させる。ナデ調整で仕上げる。他に弥生土器の細片が出土するが、少量である。弥生時代前期後半の遺構である。



第19図 SD008出土遺物実測図(79は1/2、他は1/3)

SK020(第14図) SK019の北東約3mのB-1区で検出した遺構で、SD006に切られる。平面プランは長方形を呈し、長さ1.6m、幅1.1m、深さ0.25mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。覆土は東側から流れ込み、ロームブロックを含む。SK019同様に貯蔵穴の可能性を有する。遺物は弥生土器の細片が数点のみである。弥生時代前期の所産であろう。

3) 溝(SD)

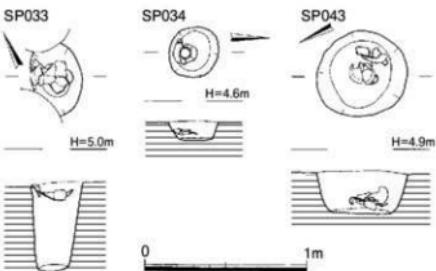
調査区中央の丘陵尾根端から緩斜面にかけて検出した弥生時代の溝3条を報告する。いずれも覆土は他の遺構と異なる水性堆積である。また、SD006・007は周辺調査区からの延長を確認できた。

SD006(第4・18図) C-2区の調査区南東際から北西方向にはば直線的に延び、西側へ緩く屈曲するが、B-1区で調査区外に延長する。幅は0.3~0.4m、深さは0.1m前後である。溝底の標高は約4.7m前後で、調査区内での高低差は殆ど認められない。断面は逆台形を呈し、覆土は灰茶褐色シルトを主体とする。また、溝底や壁面には生痕による凹凸が著しい。なお、この溝は断面形態や溝底のレベルから第90次調査SD10の延長と考えられ、両調査区の境界付近でやや鈍角気味に屈折するものと想定される。更にこの溝の南側延長は第30次SD001が相当するものと推定され、現況で「L」字形に折れる総延長70m以上の溝を復元することができる。第30次調査区では削平が両調査区より少なく、幅1.0~1.2m、深さ0.7mが遺存し、断面は逆台形を呈している。これら3調査区で溝底の標高を比較すると、僅かに0.1m本調査区が高い程度で、ほぼ同一レベルといえる。なお当初、第90次調査SD01の延長についても検討したが、この溝は北西側に向かって溝底の標高が上がっており、今回の調査区ではSD006の南西側に近接した位置で検出した極浅い溝がその延伸ではないかと判断している。

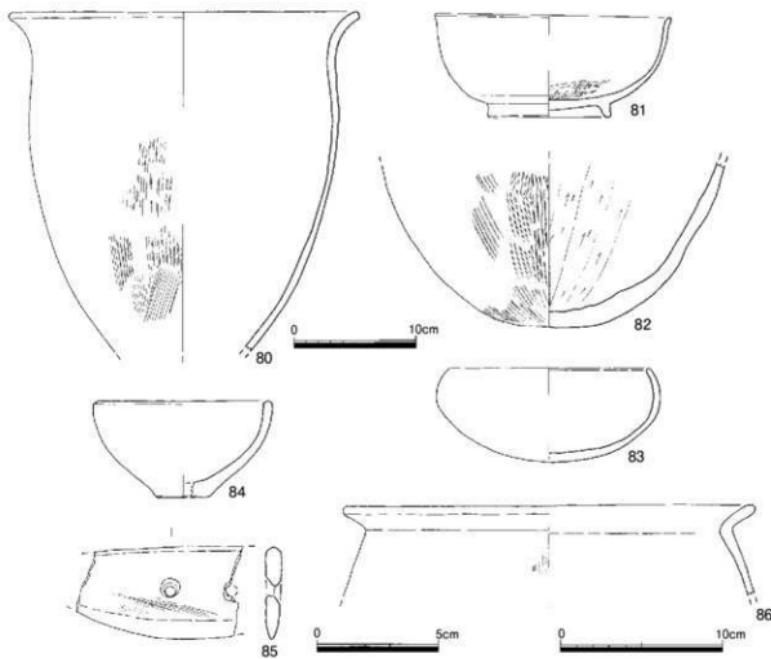
遺物は本調査区においては、弥生土器と考えられる細片が少量出土したにとどまるが、第30次調査では、比較的多くの出土遺物があり、弥生時代中期後半に掘削され、古墳時代前期に埋没したものと考えられている。

SD007(第4・18図) C-2区の調査区南東際からC-1区に延びる溝で、SD008を切る(第18図D-D')。また、SC021を北端部で僅かに切り、掘り込みはその地点で途切れるが、その先は生痕の窪みが断続的に見られ、従来は更に延長していたものと推定される。後述するように溝は数度の掘り直しがなされるが、幅は0.7~1.1m、深さ0.1~0.35mである。溝底の標高は4.45m前後を測り、僅かに北側が低くなる。断面は逆台形を呈し、覆土の下層には粗砂が認められた。また、溝底や壁面には生痕による侵食が著しい。遺存状況の良好な南東側の土層観察(第18図F-F')では、2層、3~6層群、7~8層群をまとまりとする計3回の掘り直しが看取でき、いずれも水性堆積が顕著に認められる。

出土遺物(第18図) 65~67は弥生土器で、65・66は甕である。65の口縁部は強く立ち上がる逆「L」字状を呈し、胴部には張りがある。66は内面が僅かに内湾して立ち上がる口縁部下に断面三角形の突帯を貼付する。共に器面が風化する。67は支脚で、指オサエで調整する。68は安山岩質の石庖



第20図 SP033・034・043実測図(1/30)

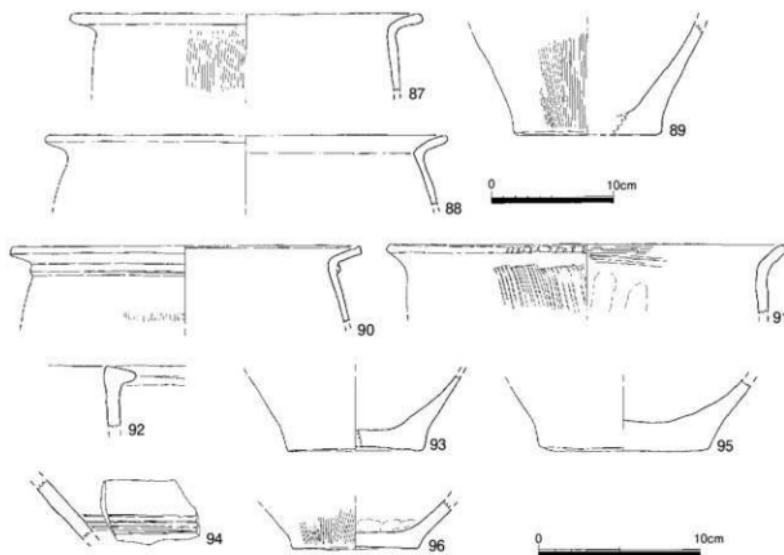


第21図 ピット出土遺物実測図(85は1/2、80は1/4、他は1/3)

丁、69は滑石製紡錘車で、共に欠損している。他にも弥生土器片が出土しているが、細片が多い。これらの出土遺物から弥生時代中期末から後期初頭頃の溝と考えられる。

SD008(第4・18図) SD007の北西側にはほぼ並行し、C-2区調査区南東際から丘陵落ち際の緩斜面に沿って僅かに蛇行しながらC-D-1区の調査区外へと延びる溝で、SC010・021を切り、SD007に僅かに切られる(第18図D-D')。また、SC021と重複する箇所では、北西側に溝が分岐する。なお、調査区の南東壁面の土層観察(第5図C層)では、SX011包含層とした4層から掘り込まれていることが判明した。溝は數度の掘り直しがなされるものの、幅1.3~1.8m、深さ0.6~1.0mを測る。なお、溝底の標高は3.7m前後で、僅かに北側に低く傾斜する。また、分岐した溝底の標高は高く、約4mである。完掘後の溝の形態は、テラスや段を有するが、土層観察(第18図D-D'、G-G')によると、計3回に亘る掘り直しの結果によるものである。前者では、1~4層群、5~7層群、8~11層群、後者では、1~5層群、6~10層群、11~13層群がそれぞれ相当し、粗砂やシルト等の水性堆積物が認められた。また、SD007同様に溝底や壁面には生痕侵食による凹凸が著しい。

出土遺物(第19図) 遺物の取り上げは、大きく上・下層に区分して行ったが、土層図のとおり、必ずしも時間差を示すものではない。70~78は弥生土器で、70~72は壺である。70は突帯の巡る頸部から直線的な口縁部が立ち上がる直口壺である。71は鉤形口縁を呈する広口壺で、頸部に断面「M」字



第22図 SX011および遺構検出時出土遺物実測図(87・88・90は1/4、他は1/3)

状の突帯を2条貼付する。外面および内面の口縁部下まで赤色顔料が塗布される。72は底部片で、外面に刷毛目が残る。73~76は壺である。73は口縁部内面が内湾して立ち上がるもので、外面には断面三角形の低い突帯を配する。74~76は逆「L」字状の口縁を呈するもので、立ち上がりが強い。74の内面には稜を有する。77は鉢で、口縁部は内湾して取める。内外面に赤色顔料を塗布する。78は外面を指オサエにより調整する支脚で、裾部が広がる。79は滑石製の紡錘車で、径5.0~5.3cm、重量27.5gを測る。73・76・78は上層、他は下層出土である。他にも弥生土器片や黒曜石片等が出土している。以上の出土遺物から弥生時代中期末頃の遺構に位置付けられる。

4) ピット(SP)

ここでは、単独のピット状遺構および出土遺物について報告する。

SP033(第20図、第21図80) B-2区で検出した楕円形を呈するピットで、深さ0.55mを測る。覆土の上層で、土器片が出土した。80はそれらを接合した弥生土器の壺で、刻みのない如意形口縁を呈する。胴部はやや張りがある。外面には刷毛目調整がある。弥生時代前期の遺構であろう。

SP034(第20図、第21図81) 後述するSX011の上層から掘り込まれるピットで、D-2区に位置する。覆土は灰褐色シルトで、外底部を上に向けた黒色土器A類焼(81)が出土した。薄手のつくりで、低い高台を貼付する。器面の風化がすすむが、内面にはヘラ研磨が施される。10世紀代であろう。

SP043(第20図、第21図82・83) B-1区で確認した円形のピットである。覆土の下層より土師器壺(82)、鉢(83)が出土した。82は丸底で、外面に刷毛目、内面にヘラ削りを施す。83は口縁部が内湾して立ち上がるもので、赤橙色を呈するが、器面が風化する。5世紀代であろう。

SP147(第21図85) B-1区の円形ピットから出土した粘板岩製の半月形石庖丁で、幅3.8cm、紐孔間2.5cmを測る。

SP201(第21図84) 弥生土器の素口縁の鉢である。器面の風化により、調整は不明である。C-2区に位置する円形ピットからの出土である。

5) その他の遺構(SX)と遺物

最後にSX011とした包含層および遺構検出時に出土した遺物について報告を行う。

SX011包含層 III.-1. 概要で述べたように、今回遺構面とした鳥柄ローム層の上層には、第5図の壁面土層図のとおり、3・4層とした粘性のある褐色土系の堆積が認められた。D-2区の斜面上に傾斜と直交方向のベルトを一部残し、人力にて掘り下げを行い、ここではほぼ3層を上層、4層を下層として包含層遺物を取り上げた。遺物の大半は層界付近の上層に多く含まれ、下層は細片で遺物量は少ない。なお、先述のとおり上層の上面ではSP034を、両層を除去した鳥柄ローム層上面でSC015を確認している。また、SD008は4層から掘り込まれる。

出土遺物(第22図87~89) いずれも上層出土の弥生土器壺である。87・88は逆「L」字形の口縁部を呈するもので、88は強く立ち上がり、胴部に張りがある。87の内面の稜は緩い。89は底部で、外面に刷毛目調整を行なう。他にも赤色顔料を塗布した弥生土器の細片や黒曜石剥片等が出土した。これらの出土遺物や他の遺構の前後関係から弥生時代中期後半から末頃の包含層と推定される。

遺構検出時出土遺物(第22図90~96) いずれも弥生土器で、90~93は壺である。90はヨコナデにより口縁端部を僅かに摘み上げる。91は如意形口縁を呈し、口唇部全面に刻目を施す。92は口縁部に断面三角形の突帯を貼付する。93は底部で、器面の風化がすむ。94~96は壺で、94の肩部外面には4条のヘラ描き沈線が巡る。95・96は底部で、95は厚味がある。96の外面は刷毛目を施す。

3. 結語

今回の調査で検出した遺構のうち、多数を占める弥生時代について若干のまとめを行っておく。

まず、竪穴住居であるが、中期末に位置付けられるSC018を除く5軒が前期後半から末前後の所産と考えられ、平面プランには円形(SC005・009)と方形(SC010・015・021)がある。方形住居は主柱穴が判然とせず、小形のものが多い。また、円形プランの2軒は共に松菊里タイプのもので、SC009はやや方形気味のプランながら、4本柱の定型的なもので、前期後半に比定される。SC005は出土遺物に乏しいが、後出的な不規則な多主柱配置を有し、前期後半から中期初頭頃の時期を想定している。これら二者と同様の竪穴住居は南東側に隣接する第90次調査区においても検出されており(SC09・16)、同一級斜面上に占地している。

また、3条の溝は中期後半から後期初頭に位置付けられ、SD006は本文中で記したように延長70m以上を測る中期後半代の環濠の一部である可能性があり、この内部にはSC018や第30次調査の井戸3基(SE009・014・018)が含まれる。今後の周辺調査成果を待って再検討していかたい。SD007・008は台地縁辺部の斜面に沿って近接して掘削される。また、計6回に及ぶ掘り直しの状況から、中期末から後期初頭の一定期間に連続して存在したもので、水流を伴う堆積物やその立地から灌漑水路であると考えられる。東側の山王遺跡を隔てる御笠川旧河道から引水したものと想定され、水路の維持管理や經營がなされたことが窺える。

土坑のうち、SK019・020は前期の貯蔵穴の可能性を有するが、その主体は第30次調査区周辺であり、分布域の縁辺部に該当しよう。よって周辺調査区と併せて、該地の前期集落は、尾根線付近に貯蔵穴、緩斜面上に竪穴住居を配置する構成を有することが明らかになってきた。

図 版



作業風景



(1) 調査区南東側全景(北から)

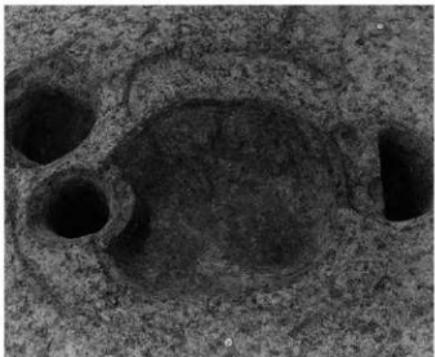


(2) 調査区北西側全景(北から)

図版2



(1) SC005(南西から)



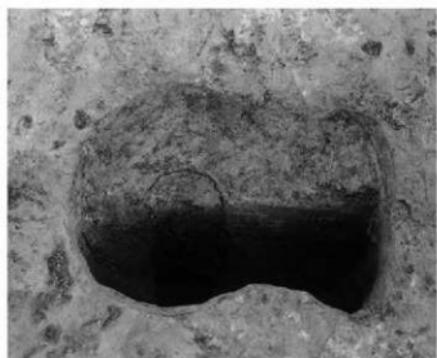
(2) SC005(P11)(西から)



(3) SC009(南東から)



(4) SC009土層(東から)



(5) SC009(P 7)土層(西から)



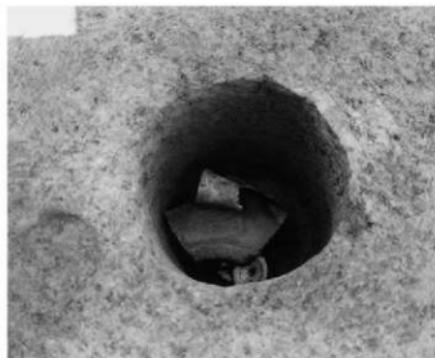
(6) SC010(北東から)



(1) SC015(北西から)



(2) SC018(南東から)



(3) SC018(P 1)(東から)



(4) SC018(P 2)(北東から)



(5) SC018(P 3)(北から)

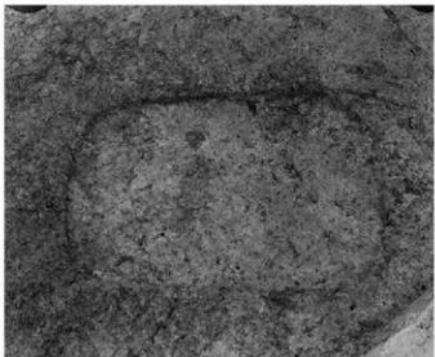


(6) SC021(南西から)

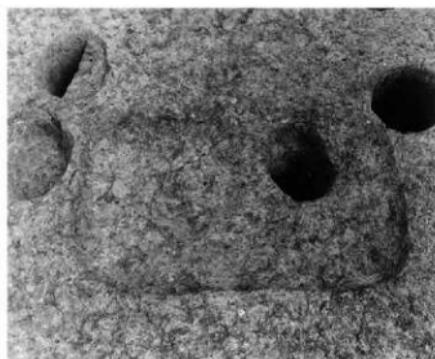
図版 4



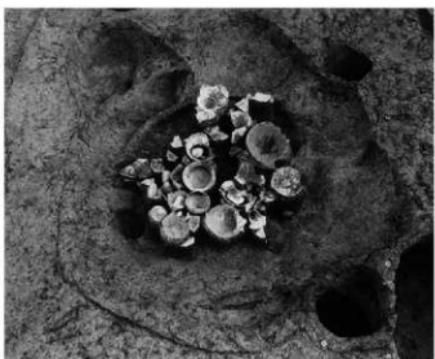
(1) SK001(東から)



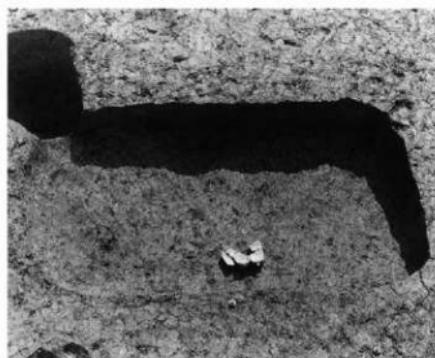
(2) SK002(西から)



(3) SK003(西から)



(4) SK016(北西から)



(5) SK019(北から)



(6) SK020(南東から)



(1) SD006南東側(北西から)



(2) SD007(左)・SD008.北側(南東から)



(3) SD008南側(北西から)



(4) SD007(F - F')土層(北西から)



(5) SD008(G - G')土層(北西から)



(6) SP043(北西から)

図版 6



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひえ53	ひえいせきぐんない110じちょうさはうこく一					
書名	比恵53	-比恵遺跡群第110次調査報告-					
副書名							
巻次							
シリーズ名		福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号		第1003集					
編著者名		榎本義嗣					
編集機関		福岡市教育委員会					
発行機関		福岡市教育委員会					
発行年月日		2008年3月31日					
郵便番号		810-8621					
住所		福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号					
電話番号		092-711-4667					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)			
比恵遺跡群 第110次	福岡県福岡市 博多区博多駅南 4丁目223、237-1	40132	0127	33° 130° 34' 25' 56' 42'	20060914 ~ 20061115	571.7	霧祭場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群 第110次	集落	弥生	堅穴住居 土坑 溝 ヒット 多數	弥生土器(壺・甕・鉢・支脚)、石器(扁 平片刃石斧、太型船形石斧、石庖丁、磨 石車輪、黒曜石剥片)、土製品(投擲) 等	松菊里タイプの堅穴住居を含む弥生時代前期 の良好な集落を検出した。また、弥生時代中期 の溝には誰流木路および環濠と推定される ものがある。		
	集落	古墳	土坑	1 古式土器(壺・甕・鉢・高环・器台)			

ひ
比 恵 53

—比恵遺跡群第110次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1003集

2008(平成20)年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092) 711-4667

印刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4-10